私と図書館

私とマレーシアの図書館

経営学部　平賀 正剛

マレーシアの会計制度に大きな関心のあった私は、クアラルンプールにあるマラヤ大学ビジネス会計学部で1年間の在外研究の機会を得た。2010年のことである。マラヤ大学といえば、日本では東大にあたる国立の最難関。さぞや蔵書もすごいだろうと、興奮しながら同校の図書館本館を訪れた。

紐で十字に縛られた古雑誌がいくつも書棚に押し込められている。聞けば廃棄図書ではなく、未整理の蔵書だという。万事スローペースのマレーシア。受け入れた本をのんびり整理しているうち、山になってしまったのだろう。図書館というより古紙のリサイクルセンターにいるようだった、というのは大袈裟か。

また別の日、ある資料を求めて市内で一番大きな公立図書館に向かった。ウェブで確認した番号を頼りに書棚を探すが、一向に見つからない。たまりかねて職員に尋ねると、調べてくれるという。20分程待っただろうか、別の女性職員の所に連れていかれ、さらに待つこと10分。「あなたの探している本はもう廃棄されていますね」—え？だったらいつまでもデータベースに載せておいてはダメだろう？この図書館にあるというから、わざわざ来たのに…。

日本では考えられない、どこまでもテキトーなマレーシアの図書館。でもいい所もある。「複写禁止」と書かれている資料でも、職員さんに聞いてみるとコピー OKだったりする。おかげで公認会計士協会の資料室では、いろいろ貴重な資料を入手することもできた。

ある日、研究棟に隣接する学部の図書室で本を探していると、薄い黒表紙の冊子を見つけた。文字は旧式のタイプ打ち、紙もすでに茶色くしなびた汚いこの小誌は、マレーシア公認会計士協会が1980年に作った会員向けの文書で、当時の会計事情が分かる貴重な一次資料だった。この時代については資料に乏しく、わずかな二次文献に頼って論文を書くしかなかった。まさに値千金の資料との邂逅。他にももっと貴重なものが眠っているかもしれない。そう思うと、高く積まれた未整理図書が宝の山に見えてきた。

マレーシアの図書館では気を付けなくてはならないことがある。厚着をしていくことだ。この国では図書館はじめ、公共施設は寒いくらいに冷房が効いている。最初、知らずに半袖シャツで数時間過ごし、風邪を引いた。仲の良かったチャン先生に「図書館に行くときは長袖だね」と言ったら、それが彼女の笑いのツボだったらしい。カラカラ笑っていた。